

「ラブひな」快調 赤松 健氏

あかまつ・けん 1968年神奈川県生まれ。中央大学文学部国文学科に入学。漫画研究会、アニメーション研究会、映画研究会と、3つのサークルに同時に所属。大学卒業直後に『ひと夏のKIDSゲーム』で、第50回少年マガジン賞新人賞入選、審査員特別賞を受賞。その半年後に週刊少年マガジン18号（1994年）から「AIが止まらない」でデビュー。現在は同誌で『ラブひな』を連載中。

ふとしたことから、女子寮「ひなた荘」の管理人を勤めることになった主人公、浦島景太郎。東大を目指して浪人中の彼が巻き起こす痛快ラブコメディ『ラブひな』が現在、週刊少年マガジン（講談社）で連載され、人気を博している。昨年には、東京テレビ系でアニメ化され、その後も1時間のスペシャル番組が放送されるなど快進撃を続けている。その原作者で漫画家の赤松健さんが、中央大学出身ということを知っている学生は意外に少ない。およそ非マンガ的なまじめ顔の赤松さん。「学生時代は3つのサークルをグルグル回っていましたから、授業に出る暇なんか……」といったのけたかと思つと、「必ず6〜7時間は寝ます」という「堅実派」の一面もぞかせる。そこで赤松先輩の素顔を後輩の皆さんにお届けしよう。

（学生記者・竹内 一郎）



授業よりサークル忙しかった

★まず、大学入学以前のお話から伺いたいのですが。

——中学生のころからパソコンをやっていて、海城高校2、3年生の時自分のパソコンで作ったゲームを、ゲーム会社に持ち込んだんですよ。それで印税をもらったりして、楽しくやっていたんですけど、途中でやめなくなっただけですね。というのは、今でこそゲーム開発は完全にシステム化されていますが、その当時ぐらいいからゲーム開発が1人で行えるものではなくなってきたしまった。

つまり、分業化ですね。私は1人でやりたいタイプなんで、合わなくなっただけですね。それで大学に入る前に、将来は何になりたいかを真剣に考えました。図まで描いて計画的に決めましたよ。なるべくリスクの少ない安全な道を行こうと（笑い）。

安全な道といっても、自分のやりたい「創作」の道から外れるということはまったく考えませんでした。一番、最後に残ったのが漫画だったというだけで、漫画家を目指した理由というのは特にないんですよ。これって、ある意味で消去法ですから……。

★とりあえず漫画、というわけですか。

——そういうわけでもないんです。とにかく中央大学に入学と同時に、漫画研究会、アニメーション研究会、映画研究会に入りました。3つも掛け持ちしているから、ものすごく忙しくて学校の授業は必修の体育以外は滅多に出ませんでした。別に授業に興味はなかったわけではなく、それ以上にサークルの方が面白かったというわけです。どのサークルも同



5人のアシスタントは全員OB

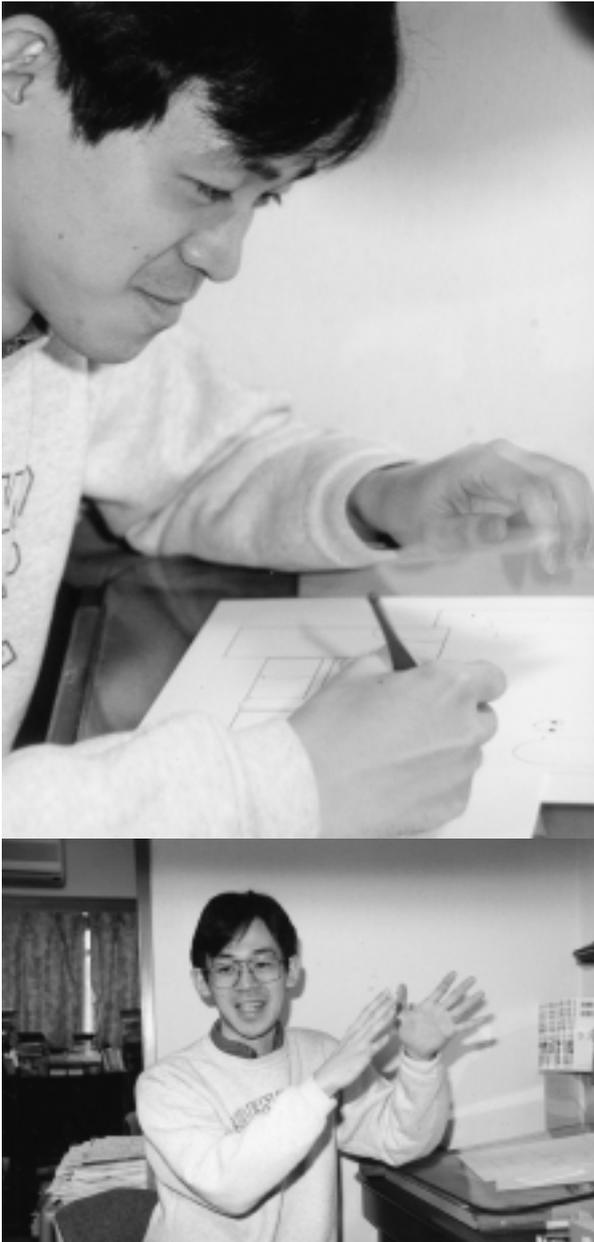
じぶらい一生懸命やりました。

3年生ぐらいになると、仕事としてやっていけるのかなということも考えますよね。するとさまざまな問題が出てきます。先ずは金銭的な面もあるでしょう。あと、映画やアニメーションは分業で制作する関係から、自分のやりたいことが出来ないのではないかとというような、仕事の内容だったりして……。そう考えると、映画やアニメーションで食べていくのは難しいかなと思うようになりました。

その点、漫画はある程度は思ったように作れますから、仮に失敗しても自分の責任範囲で受け止められる。まあ、小説でもよかったです。わざわざ文学部の国文学を専攻したんですから。だけど大学の授業では古典の勉強だったり、文学の解釈的な話であったりと、私が一番したかった「小説の書き方」に通じるようなものは、あまり教えてくれませんでした。

★絵はいつ頃から書くようになったんですか。

——大学に入ってからです。漫画研究会とアニメーション研究会には絵



のうまい人がたくさんいたので、そういう人の真似をしたりして覚えめました。あと、アニメーション研究会は1年に1回、共同作品を作るんです。その時、動画を描くのを担当したので、いろいろな角度の顔を描いたりして勉強しました。ただね、私の場合は普通の人と違って絵を描くことに、それほど執着がないんですよ。やっぱり、創作で食べていきたいということが大前提にあったんで……。

映画もかなり、はまってやりましたよ。漫画と映画の間がアニメー



この一室から作品は誕生する



「ラブひな」の放映ポスター

★作品のアイデアはどのようにして考えるのですか。なぜ、ラブコメディーなんです。次回作もラブコ

以来、仕事場で5人のアシスタントに手伝ってもらっています。彼らは全員、中大出身者なんです。彼らには背景とか、仕上げをやってもらって、ネームとか下書きは私がやっています。それでも「いっぱいいっぱい」という感じで、締切りに間に合わないくらいです。もう、家にも帰れず、仕事場が自宅化してますよ。健全な社会生活とは、ほど遠いですね（笑い）。

シヨンドとすると、映画の先にある舞台なんかも興味がありました。役者さんがいて、照明さんがいて、監督がいるという映画の世界はやっていて楽しかったです。でも、そのシステムの頂点で、好きな作品を作るというふうになるまでには、かなり時間がかかります。その点、漫画は「一発逆転」が可能です。

★どんな人の作品に強い影響を受けましたか。

——とくに強く受けたということはありません。あえていうなら、アニメでいえば宮崎駿かなあ。カット割りとか、セリフとか、大変参考になりました。私が大学に入ったころは、ちょうど「魔女の宅急便」（1989年公開）が大ブームで、よく見ましたよ。映画ですと、ジェームス・キャメロンですね。日本のものは、そんなに見ませんでした。また、映

画研究会が上映会を開いていましたので、そこで「カサブランカ」のような名作を結構見たことも、けっこう勉強になりました。

★デビューまでの話を聞かせてください。

——アニメや映画製作で忙しい中でも、少しずつ描いていたんですよ。友だちにも手伝ってもらいながら、最初は『週刊少年サンデー』に投稿したんですけど全然、引掛からなかったんです。それからどの漫画誌に投稿するか考えたんですよ。

その頃からラブコメディ的な作品を描いていたので、その路線の有力誌でもあった『週刊少年サンデー』に投稿したんですが、同じようなことを考えている人はいっぱいいるんですね。そこで、そういった路線をあまり打ち出していなかった『週刊少年マガジン』に投稿したら、採用されたというわけです。

メディーですが。

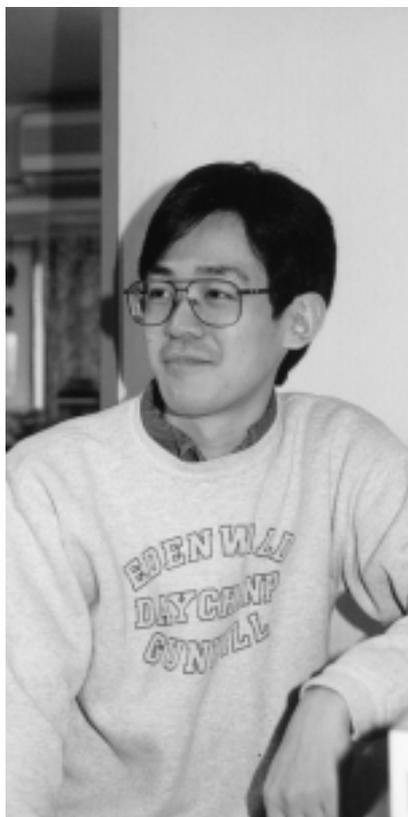
——ウーン、やっぱり編集者との打ち合わせで考えていくというパターンがほとんどですね。その漫画誌ならではカラーというものがありますから、1人で考えるというときは、あまりありません。なぜ、ラブコメディーかは、単にラブコメディーが好きだからということでしょうかね。デビュー作の『A・Iが止まらない!』なんかは、「君、パソコン詳しいんだよね。それにラブコメディーが好きなんだから、それを合わせてみたら?」と編集者にいわれたのがきっかけでした。それで、パソコンのプログラムが得意な高校生が主人公のラブコメディーが誕生したわけなんです。

次回作に関してはまだ、分かりません。いまは、まだノーコメントということですね(笑)。ただ、ラブコメディーをやめようというつもりも、特にありません。

★漫画を描くにあたって、心がけていることはなんですか。

——週刊とか、月刊だとか、あるいは漫画のジャンルによっても、さまざまだと思いますが、週刊の場合は自分を制御するというか、自己管理をする能力が必要でしょうね。タイトなスケジュールの中で、やるべきことをうまく考えないとけませんから。

また、私が描くラブコメディーというジャンルでいえば、主人公の男の子がいて、ヒロインがいて、その周りのサブキャラクターの女の子たちがいて……と、あまり王道から外れすぎないようにしていますね。それと私が基本的には新しいことというのは、特にやっていません。子供



の頃に見たり読んだりしたものと、だいたい似たようなことをやっているんですよね。ヒットするジャンルというのも周期というものがあります。昔、「タッチ」とか、そういう恋愛ものが流行した時期があって、それがしばらく冷めて、また流行するというように。

★漫画の流行は常にチェックしているんでしょうか。

——大抵の雑誌には目を通すようにしています。少年誌から麻雀誌までね。テレビは時間がなくて見られません。あとは、私のホームページの掲示板でも「いま、何が面白いとか、何が流行しているとか」誰かが書き込んでくれているので、大いに参考にしています。でもね、若い世代の漫画離れもかなり進んでいると思います。本からも離れ、漫画からも離れ、まあ多様化ということでしょうかね(笑)。

漫画は一発逆転が可能

★ところで、いまの漫画家志望の大学生をどう思いますか。

——いまは割と自分で作品を作ろうとする人が少なくなったような気が

いつも安全策を選ぶ男

しますね。別のジャンルでもそう
す。批評する人は多いですがね。そ
れも仕方ないのかもしれない。

システムのな問題もあって、ゲー
ムにしても、アニメーションにし
ても、1人で作れるような時代では
ありませんから。

でも、もう少しで「揺り返し」が
きますよ。いままで受け手だった
人が自分で作るようになる動き
です。つまり、優れた作品が量産
された時代は受け手も増えるん
ですが、その時期を経たいま、
そろそろ、そこから抜け出よう
とする人が出て来るでしょう。そ
して、漫画の内容もね。重いテーマ
とが、軽いテーマとが、その時代
が反映しますね。暗い時代だと
明い作品が流行したり、景気の
いい時代だと重いテーマの作品
といった具合に。私としては、
とりあえずライバルがあまり
増えずに、良い作品がたくさん
世に出てくれると、うれしい
んですがね（笑い）。

★ご自分の性格をどう分析
されますか。

——いつも安全策という
か（笑い）、一番無難なところ
を選びますね。



いま、サラリーマンが安全かとい
うと、そんなこともないです
しね。あと、けっこう計画的な
ところもあります。

この2つは結局つながっている
と思うんですよ。安全な道を選
ぶのだから、前もって情報を
集め、検討を加えたうえで、
決定を下すわけですから。

★きょうは、お忙しいところ
を貴重なお話ありがとうございます。



インタビューに答える赤松先輩

インタビューを終えて

仕事場（マンション）のドアを
開けて、出迎えてくれた赤松
さんは、物静かな印象だった。
だが、インタビュー後の印象は
活動家で精神的にタフな方とい
う、まったく正反対のものだ
った。きゃしゃな体に秘めた
パワフルな感じに終始、圧倒
され続けた。

入念な計画と 大胆な行動

物事を始める前に入念な計
画を立てる。その冷静さと、
いったん行動を起こすと手を
抜くことを知らない貪欲さ。
その二面性が「漫画家・赤松
健」を支えているのだろう。
私は、なにか将来のヒント
をつかんだような気がした。

（竹内）